

組織目標評価報告書（平成23年度）

部局名：理学部

目 標	目標の達成状況(成果)及び新たに生じた課題への取組 (部局での検証とそれに対する取組)
①教育領域	自己評価
①-1 目標	<p>1 作成したカリキュラムポリシーに基づく各学科カリキュラムの有効性について検証を行い、明らかとなった問題点は次年度のカリキュラムの改訂に反映させた。また、文部科学省の理数学生育成支援事業に採択され、学習意欲の高い優秀な学生を対象にフロンティアサイエンティスト特別コースを開設し、学部カリキュラムポリシーの実質化に努めた。学部学生の国際交流を促進するために、国立台湾大学理学院と理学部とで国際ワークショップを相互に開催し、学部学生の英語力の向上と国際性の獲得を支援した。</p> <p>2 入試制度について検討を行い、今年度国際バカロレア入試を導入し、平成25年度入試からAO入試を廃止し、後期日程入試を開始する。3年次編入学試験においては、新たに推薦枠を設置し、募集要項の記載も充実させ志願し易いようにした。学部独自の学部公開行事や先端研究の公開講演会を実施するなど広報活動を積極的に行い、優秀な志願者の確保に努めた。また、日韓理工系留學生制度による留學生を増加させるため、広報活動のために韓国に教員を派遣した。なお、MPコースの責任学部として、国際バカロレアの志願者1名に対し入学試験を実施し、アドミッションセンターとともに、欧州のバカロレア校にて進学説明を行い志願者の開拓を行った。</p> <p>3 学習支援ソフトMoodleの利用の促進を図った。</p> <p>4 自主学習を促すためにアカデミックアドバイザーアシスタント制度を昨年度と同様に実施し、大学院生をTAとして雇用して、学部学生の自主学習の支援にあたらせたところ、本制度を利用した学部学生には好評であり、成果を上げられた。さらに、フロンティアサイエンティスト特別コース生用の自主学習室も新たに整備した。障がい学生のために昇降機を整備するとともに、講義室のビデオプロジェクターの更新、暗幕の整備など学習環境の整備・充実にも努めた。また、建物周辺の環境整備に努めて学習環境の向上に努力した。</p> <p>5 昨年度に引き続き、廊下の照明のLED化、窓ガラスの2重ガラス化をおこなった。また、空調機の温度設定の集中管理を継続して実施し、タイマーを設置し不要な照明の消灯に努めた。</p>
1 作成した学部学科のカリキュラムポリシーを試行的に実施し、その有効性について検証を行う。	
2 入試制度について、再検討を行うとともに、入学試験に関する広報活動を積極的に行い、優秀な学生の確保に努める。	
3 教員による学習支援ソフトの利用拡大を図る。	
4 自主学習室、ゼミ室等の学習環境の点検を行い、障がい学生を含む学生に対する学習環境などの充実を図る。	
5 省エネ対策に努める。	
①-2 目標とする(重要視する)客観的指標	
②研究領域	自己評価
②-1 目標	<p>1 本学の研究プロジェクト「原子を利用したニュートリノ質量分光プロジェクト」および、「異分野融合型研究展開による先端環境エネルギーデバイス・材料開発」は、理学部教員が中心となるプロジェクトであり、文部科学省からの特別経費(プロジェクト分)を配分されている。また、生物学科所属教員のグループの研究成果が、米国の学術雑誌Scienceにおける2011年の10大研究の一つとして紹介され、これを記念して公開講演会を開催した。</p>
1 戦略的重点プロジェクト研究及び新分野の創成を目指す基礎研究を推進する。	
②-2 目標とする(重要視する)客観的指標	
③社会貢献(診療を含む)領域	自己評価
③-1 目標	<p>1 公開講座・出前授業・研究室公開を例年通り実施し、学部の教育・研究内容の公開を行った。本年はさらに理学部教員による先端的研究の公開講演会を実施し、地域社会への貢献に努めた。また、従来通り高大連携事業として高校からの学部訪問を受け入れた。さらに、高校のスーパーサイエンスハイスクール(SSH)事業に協力した。特に、今年度附属臨海実験所が文部科学省より教育共同利用拠点に認定され、西日本を中心とした全国の大学の共同利用拠点となり、他大学並びに地域の教育機関との共同利用、また、東日本の被災大学への支援など大きく地域貢献をしている。</p>
1 公開講座・出前授業・研究室公開を通じて、学部の教育・研究内容を公開し、地域社会に貢献する。	
③-2 目標とする(重要視する)客観的指標	
【総括記述欄】	
<p>教育領域においては、優れた達成状況にある。文部科学省の理数学生育成支援事業に採択されると共に附属臨海実験所が教育共同利用拠点に認定された。これは、これまでの実績と優れた計画が認められたものであるが、今後の学部教育全般に及び教育方法や内容の改善の契機となることが期待され、初年度であるが順調に実施できている。しかしながら、従来の業務に追加して、新規事業を開始しているため、教職員の業務量の増加が課題となるとともに、教育領域での教員の個人評価法の再検討・改善も必要となってきている。また、最近の学生の状況を踏まえ、学生のメンタルヘルスのために講演会を開催したが、さらに個々の学生に対応するメンタルヘルスに関する指導が必要である。また、実質的なキャリア支援事業の実施が今後の課題である。研究領域においては、良好な達成状況である。特に、光合成研究の研究成果が極めて高い評価を受け、一層の研究展開の契機となるとともに、理学部における基礎研究の重要性を社会に広く知らしめる機会となった。その他の重点研究プロジェクトにも多数の理学部教員がたずさわって、順調と考えられる。理学部内の研究スペースの狭隘化が深刻になってきているので、研究環境の改善が必須の課題である。社会貢献の領域では、高大連携を中心に良好な達成状況にある。教育面での他大学との連携も順調に進行している。</p>	